
猫虎の素

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫虎の素

【Nコード】

N4662A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

気づくと俺は変なぬいぐるみになって、その後ろには妖しい女の子がいた。俺はどうなったんだっ！そして、この子は誰なんだよ！

色んな事が起きる現代。日々進歩している文明。

そんな事を考えながらふと、自分の事を見てみると、なんとも奇妙な感じた。

なんでこんな事になっているんだろう……。

「なんだ、こりゃ……」

俺は自分の姿を鏡で確認して驚いていた。

「えっと……猫？ 虎？」

鏡に映るのは猫みたいないな虎みたいない生き物。俺が右手をあげれば、鏡の中も右手を上げる。

首を傾げると、鏡の中も傾げる。うむ……間違いなく、”これ”は俺だ。

「これは、俺だな……しかし」

鏡は全身を映せるタイプの物。

しかし、俺が映っているのは鏡の下の方 30CMくらいのことだった。

「小さくなってる？ しかも……これ、フカフカ？」

なんていうのか……その、人形なのか、ぬいぐるみなのか、おもちゃなのか、よく分からない感じ手触りで、毛がフカフカして、結構気持ちいい。俺……結構、馴染んでないか？

「……それに、誰だ？」

俺の見たる鏡には”この”俺の姿以外に、もう一人映っていた。

女の子なんだけど、俺の知り合いではない。と言うか、こんな知り合いはいない。

「誰だ……あんた？」

取り合えず、鏡越しに聞いてみる。だって、動けないから。

「えっと……その、初めまして、わ、わわわ、わたしは……」

一人パニック状態で、勝手に慌てふためく女の子。

アタフタして、ジタバタしてる何とも妖しい、いや落ち着きがない女の子だな。

「落ち着け」

「ふあ！ は、ははは、はいっ！ すうーはあー……」

訂正しよう 多分、こいつは馬鹿だ。いや、絶対に馬鹿だ。

「それで……お前は、誰だ？」

「わ、わわわ、わたしは、リームと申しますっ！ ……えっと、あの、貴方はどちら様で……」

自己紹介を終えた女の子 リームは、今度は俺に聞いていた。

この女は絶対におかしい。直感と言うか、俺の五感がシックスセンスを覚醒するくらいの勢いで、断言している。

こいつは……おかしい。

「お前は……初対面の人間に、こんな事をするのか？」

「は、わわわっ！ ご、ごごご、ごめんなさい！ だって……神様が」

「……ん？ か、かみさま？」

この子は……その、かわいそうな子なのか？ 痛い子なのか？

「……神様って？」

「神様は神様です。えっと……自己中な神様でして、私も結構苦労してまして……」

ハンカチで涙を拭く真似をするリームは、自分の身の上話を始めてしまった。

面倒だが、とりあえず話を合わせておかないと、色々大変そうだな。

「大変そうだな……お前も」

「分かってくれますかあ」

「ああ……それで何しに来たんだ？」

俺の質問に呆然とした表情のまま、固まってしまったリームだが、微動だにしない。

「おおーい……生きてるか？」

「……にゃ！ 私は誰？」

「ボケるな。さつさと答えろ」

「はい。そんなに怒らなくても……気が短い人は短気って言います」
「当たり前だ。訳の分からん事を言うな」

なんとも真顔でボケてくるこの馬鹿を、無視したい気分なのだが
そもいかない。そもそも話が進んでない。と言うか、寧ろ話がず
れている。軌道修正しなくては。

「それで……俺はどうなってるんだ？」

「いきなり戻りましたね。えっと、貴方はどちら様で……」

「俺は智明。早良智明だ」

話がループしそうなので、止めてみた。こいつは絶対に天然馬鹿だ。

「……さわりちかん？」

「さわらちあきだっ！」

「ご、ごめんなさいっ！ それで智明様……」

頭を抱えて蹲まぐさったかなり痛い子が、俺を潤んだ目で見つめてくる。
その目は反則だと思っのだが、ね。

「なんだ？ ……メイド」

「私はメイドではありません。一応は、これでも天使です」

「どこに、メイド服を着た天使がいるんだよ」

「ここにいますっ！」

自信たっぷりに胸を逸らしていくリームは、得意げな顔をしてい
た。

なんとも、真平らな胸が哀愁を呼ぶ事だ……。

そこだけは、見なかった事にしよう。こいつの為だと思うので
それよりも、やってしまっ方がいいだろうか？

「だ、だだだ、だめですっ！ わ、わわわ、わたしは……その」

「……何を言ってる？」

慌てふためき、顔を真っ赤に染めて危ない事を口走っている。やっぱり、こいつは危険だ。

「そ、その……初めてなので　痛く」

「だ、ま、れ、っ！　この変態天使がっ！」

この馬鹿は危険だ。限りなく、そして激しく危険だ。俺の第2回脳内会議で、36対90で危険天使に認定された。とりあえず、この姿を元に戻してもらおう。それから、こいつをじっくり料理しよう。

「わ、わわわ、わたしを、た、た、たべるんですかー！」

「黙れと言っているだろうがっ！　天然馬鹿天使っ」

「ひ、ひどいですうー！　……うわぁーん」

大口を開けて泣き出した馬鹿天使の涙が、まるで噴水のようにアイチを描いているのだが。

なんか、昔見た漫画を彷彿とされる光景だな。

「泣く前に、俺を元に戻せよっ！」

「やですっ！」

「早っ！　即答かよっ。しかも泣き止んでるし」

嘘泣きとは上等だ。必ず復讐してやるから覚えていろよ。あんな事やこんな事を

「変態です……智明様」

「うるさいっ！　いいから戻せ！」

「やっ！」

頬を膨らませて、ソッポ向いてしまったリームは、何を思ったのか不意に俺を方へ向き直ると、満面の笑みを浮かべて、

「だってー、可愛いんだもんっ」

「こらっ！　離せ、馬鹿　いや、お願い離してっ」

俺を抱き上げると、自分の顔を近づけて今にもキスをしそうなくらいの位置に持ってくる。

まじかで見ると……畜生、一瞬だけど可愛いなんて思った俺が嫌

いだ。

「私は好きなんですよ、キャットラ」

「……なんだ、ソレ？」

「天界で流行っているキャラクターですよ。知らないんですか？」

「知るわけないだろう　って、うおっ、だからっ！　……やめろって！」

俺の顔に頼ずりをしてくるリームの頬が、くすぐったいやら、恥ずかしいやら、勘弁して欲しい気持ちでいっぱいなんだが。

「これは、神様が試供品の薬をくれたんですよ」

「……ん？　なんの事だ？」

いきなり話し始めたリームが、止まる事なく続けていく。

「その薬が『キャットラの素』っていう薬なんです」

「ほおー……もしま、それを俺に　」

「はいっ、神様が使って来いって言うから、試しに使ってみましたっ」

嬉しそうに俺を振り回すリーム。目の前の顔は、とっても幸せそうな顔をしている。が、それが悪魔に見えるのは、気のせいかな？

こいつ、本当に天使かよ。

「それで……戻る薬は、あるんだろうな？」

「……えー」

不貞腐れて頬を膨らますリームが、完全なる悪魔に見える。

「も、ど、せ、っ！　い、ま、す、ぐ、っ！」

「そんな可愛い声で脅しても駄目ですよ」

「うつせえ！　さっさと戻せえー！」

畜生！　動けたら、こんな奴……一思いに。

「……エッチ」

「お前は、いちいち俺の考えを読むなっ！」

「むうー！　そんな事言っていると、戻してあげません！」

「なっ！　……なんて卑怯な天使なんだ」

額に怒りマークを浮かべて怒ってるリームは、俺を見て”あっか

んべー”をしてきた。

こいつ、絶対に子供だ。精神年齢は間違いなく、三歳児並みだと判断した。

「天使は、人助けをするんじゃないのか？」

「うっ！……それは」

「目の前に、困ってる人がいるんだけど」

「本当に困ってます？」

ジト目で疑いの眼差しを向けるリームは、俺を持ち上げて更に疑いの目を向ける。

なんて、疑り深い天使なんだ。誰だ、こいつを教育した奴は教育がなつてないぞ！

「俺の目を見ろ！ 困っている目をしているだろうがっ」

「樹脂製の瞳。……えいつ」

「ぎゃあー！」

目潰しとは卑怯な！ 瞼がないので閉じる事も出来ないのに。なんで、こんなところだけリアルに作ってんだよ。

「何をするんだよっ！ めちゃくちゃ痛かったぞっ」

「あははっ……おもしろくて、つい」

「つい じゃねえよ！」

チロツつと舌を出して片目を瞑るリームは、申し訳なさそうに笑みを浮かべている。

なんだ……俺はこいつに遊ばれてるのか？ 俺の威厳って言うのが、まったくないぞ。

こうなれば、強行策に出てやる

「さっさと戻せっ！」

「嫌ですー！」

「戻せ！」

「嫌です！」

「も、ど、せ、っ！」

「む、り、で、す、っ！」

何度も繰り返す押し問答に、いい加減うんざりして疲れてきた。
どうしたらいいんだ……ん？

最後、なんか変ではなかったか？ 俺の聞き間違いではなく

「なんだ……無理って？」

「だって です」

「はっ？」

何かを喋ったのだろうが、リームの声が小さくて聞こえなかった。

「何だって？」

「ないんですっ！」

「は？ ……何が？」

「だから、持っていないんです！」

「何を……？」

段々嫌な予感が と、言うより確信がしてきた。

こいつの事だ。この後の言葉は大体の想像がついた。

「戻す薬、持っていないんですっ」

涙を目にいつぱい溜めて、リームは俺を持ち上げたまま、それこそ何かを失敗したメイドさんが許しを請うような顔をしている。やっぱり、そう来たか。とりあえず、俺はこうしよう 皆さんの期待に応えないといけないし。

「なんだとー！」

俺の絶叫が響いたところで、こいつをどうしてくれよう。そもそも、なんで俺はこんな事になっているんだよ？

「だから……それは」

「お前は喋るなっ！」

「酷いですっ！ 天権侵害です」

「やかましい！ 天権侵害ってなんだ！」

「私、天使ですから……」

なるほど、それで天権侵害か？ 納得した ではなくてっ！

駄目だ。こいつと話していると、エンドレス地獄に落ちそうだ。

「早く、何とかしろよ！」

「出来ません！」

「なんだとっ！」

「だって……出来ないもん！」

頬を膨らます仕草は可愛いが、いい加減頭に来た。

「ブリッ子してるんじゃないっ！」

「むうー！ 智明様のばかぁー！」

「うおっ！ ちょ、ま」

俺を片手で掴んで立ち上がると、思いつきり振りかぶるリーム。

そして、野球選手もびっくりの投球フォームで繰り出された剛速球

というか俺っ！

迫り来る壁。やばい！ 走馬灯が、憎たらしいくらいの笑顔で走り去っていくぞ。

ぺちっ！

「あっ……」

最後に聞こえたのは、馬鹿天使の間抜けな声だった……。

猫虎の素っ完っ

『おいっ！ これで終わりかよ！ 俺を元に戻せー！』
『無理、でーす』

（後書き）

思いつきで書いた小説？です。

無茶苦茶なないようですが、読んでいただきありがとうございます。
感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4662a/>

猫虎の素

2010年10月8日15時19分発行